
気が付いたら第四次聖杯戦争のサーヴァントに全員憑依していたZ E

てんぷら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気が付いたら第四次聖杯戦争のサーヴァントに全員憑依していた
ZE

【Nコード】

N5700Z

【作者名】

てんぷら

【あらすじ】

もしも、第四次聖杯戦争のサーヴァントに全員が憑依してしまったら。何の前触れもなくサーヴァントとして生きることになった彼らは、原作知識を生かした策謀の戦いに身を投じていく。誇りも分別もなく、蔓延る外道戦法の数々。中身が残念なサーヴァント。踊らされるマスター。

果たして、この力オスな闘いのなかで誰が笑うのやら……。

憑依物語始まるよ！（前書き）

ふと、思いついたのでインスピレーションの涌くままに書いてみました。色々至らぬ点がありますが、どうかよろしくお願いします。

憑依物語始まるよ！

気が付いたら、俺は見知らぬ祭壇に立っていた。

え？ どこココ？

確かさつきまで布団でゴロゴロ転がっていたはずだ。ならば、夢の中なのかな。こういうのを明晰夢って言うんだっけ……？

ふと、周囲を観察してみると、二人の男女が目の前に立っているのが見えた。

彼らの顔は一樣に驚きを示していた。

男はスーツの上にトレンチコートを羽織った日系人。女の方は白い髪に赤い瞳、そしてドレスを着た外国人だ。

……… ちょっと待て。

コイツら見覚えがあるぞ。どう見ても、衛宮切嗣とアイリスフィールじゃないか。

彼らとは画面を隔てた、向こう側の世界でしかご対面したことがない。

つまり、俺の脳みそは夢の世界にアニメキャラを出力したわけ、なにを言いたいのかと言うと、
恥ずかしい………。

「あなたが、アーサー王なの………？」

すると、アイリが震えるように声を漏らした。視線はこちらを向いている、つまり今の台詞は俺に向けて発せられたということだ。

おいおい、それじゃまるで俺がセイバーみたいじゃないか。
アーサー王とか、ハハハ。

結論から言おう。

俺は、かの騎士王になっていた。そして第四次聖杯戦争における『セイバー』のクラスに召喚されたサーヴァントだ。

無論、俺には普通の人間としての記憶しかなく、アーサー・ペンドラゴンとしての思い出なぞ皆無に等しい。

しかし、第四次聖杯戦争で剣を振るうセイバーとしての知識はある。

何の因果があつて、この場に、この役目に、この人物に、降りたつたかは定かではないが、これから残り六組の敵と殺し合いを演じなければならぬ。正直、不安だ。

心の内に抱く畏怖など取り払ってしまえ。

考えなければならぬことは多々あるが、俺には原作知識がある。

タイガールート？ プリズマ イリヤ？ 第五次聖杯戦争？ そんなものは知らないね。

他のサーヴァントぶっ殺して、受肉して、そしてサーヴァントの力で世界征服でもしてやんよお！

まずは切嗣との関係を良好にして、アヴァロン全て遠き理想郷を強奪だ。あれと原作知識があれば、イスカンダルやギルガメッシュなど恐るるに足らんわ！

そうと決まれば、早速マスターに挨拶をしようか。

「問おう。お前が俺のマスターか」

side out

「……勝ったぞ綺礼。この戦い、我々の勝利だ……」

魔術師・遠坂時臣は確信した。この黄金のサーヴァントこそ、自らを成就の道へ導く英雄王だと。骨の髄まで貴族を体現した彼にしては珍しく、その笑みを感熱したように紅潮させていた。傍らで控える寡黙の権化、言峰綺礼ですら、英霊に対する驚嘆をこの身を感じるのだった。それは彼がアサシンを召喚したときとは、違った意味での驚きだ。

(アサシンにも少しは風格を持って欲しかったものだ……)

綺礼は己に仕えるアサシン達の奇行を思い浮かべながら、自嘲するのだった。

そして、この場において、最も心躍らせているのは、よりもアーチャー本人だった。

(ヒロインは皆、僕のハーレム入りだ！)

彼はほくそ笑む。

英雄王として、現出した幸運に感謝しながら。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトはホテルの一室で、椅子に座り、寛いでいた。対面の席に腰を落ち着ける男と、愉快気に語らっていたのだ。

「いやはや、英霊とは一体どんな魂胆を腹の内に抱えたのかと訝しんでいたものだが……。まさか、君のような理解ある戦士が来てくれるとは、私も鼻が高い」

「いえいえ、私も貴方のようなお方が我がマスターとなられて感服の至り。是非とも、貴方の武功に一役買いたい」

柔和に微笑みながら賞賛する美丈夫と、その言葉を堪能し悦に入る魔術師の相對する様は、奇しくも長年の友人が語らうようだった。彼らの談話を、赤毛の麗人ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリは、高邁さを漂わせた澄まし顔で静聴している。

「ところで君が聖杯に祈る願望は『第二の生』だったかね」

「正確には、聖杯戦争の後もケイネス殿の雄志を傍らで拝観し続けることに在ります」

「ふん、世辞の巧い奴め」

間桐雁夜は今すぐにでも、目の前で吐き気のする笑みを浮かべる老害を血祭りに上げたかった。

間桐臓硯。

戸籍上は雁夜の父である、この下衆から間桐桜を救うために、臓硯の傀儡に成り果てるしかなかったのだ。

しかし、その呪いは叶ったのだ。他ならぬバーサーカーの手によって。

肉片を周囲に撒き散らし、汚らわしい害虫の死骸が散乱している。これが理想を腐らせた外道の成れの果てであった。

驚く雁夜を尻目に、漆黒の鎧を装着したバーサーカーは、膝をつき深く頭を下げる。狂気ではなく礼儀が、そこにあった。そして誓いを口にする。

「雁夜さん。私と共に桜ちゃんを助けましょう」

こうして、総勢七人のサーヴァントに、七人の意思が憑依した。彼らは物語の結末を知るが故に、物語をねじ曲げていくのだ。

憑依物語始まるよ！（後書き）

もう一作の方がメインなので、更新は亀ですが、絶対書ききります。

パン！ツーン！マル！見えるか！！（前書き）

ユニーク数が凄いことに……。これがタイトルホイホイの効果なのか！？

題材だけにならないよう、頑張ります！

パン！ツー！マル！見えるか！！

主を失った間桐邸で、雁夜はソファに腰を落ち着けていた。本来なら、呑気に休んでいられないのだが、いかんせん身体に蔓延る虫が疼く。恐らくは、この邸宅共々、主人の不在に何らかの拒否反応を起こしているのだろう。

血管が噛み千切り、臓物を汚染し、骨肉はすり潰されている。その痛苦は、これまでとは比べ物にならない激しさだ。

（だけど……桜ちゃんは、それ以上のハズだ）

雁夜は自分の隣で寝息を立てている、幼い少女を見つめた。先ほどまで、迫り来る激痛に声も上げず堪えていたのだ。

自分より遙かにか弱い子供が頑張っている。ならば、大の大人がみっともなく悶える暇などない。

「やはり、聖杯を手に入れるしかないのか」

以前は桜を救うための手段に過ぎなかった聖杯だが、今は自らの目的と化した。

仮に臓硯が生きていて、奴の望み通り聖杯を手にしても桜は救えなかった。聖杯を取り上げられ、ゴミのように捨てられるのが関の山だろう。今となっては後の祭りな仮定だが、雁夜を身震いさせるには十分だ。

（バーサーカーには感謝しないとな……桜）

希望の光は、雁夜を盲目にしていた闇を取り払う。クリアに視界は、目指すべきゴールを瞳に映していく。

たとえどんな悪路がまっついでいようと、あのサーヴァントがいれば、雁夜に怖いものは無かった。

side・バーサーカー

「さて……どうしたのですかね」

僕は間桐邸の自室で、思索に更けています。先程、臓硯氏を粉碎し、鶴夜氏にはダンボールライフを過ごして頂きました。雁夜さんが礼にもならないけどと苦笑しながら、部屋を一室、僕に与えてくれたのです。

雁夜さんと桜ちゃんは、下で休んでいます。虫の件もありますし、しばしの安静が必要でしょう。

バーサーカーに憑依したと知ったときは流石に戸惑いましたが、雁夜さんの末路を知る身としては、大人しく臓硯氏の手駒になるなど論外です。幸い、『狂化』による理性の喪失は見られません。

ならば、雁夜さんの人生に幸あれ。僕はあなたのために、全てを尽くしましょう。

「おや？」

何やら物音が聞こえますね……。しかし、気配は感じられません。
桜ちゃんの自室でしょうか。

僕はドアの前へ行き、少しだけ扉を開きます。僅かな隙間から中を
伺うと、そこには、

「ぐへへ……桜タンのパンツゲットだぜ！」

クローゼットから幼女のパンツを漁っている、髑髏の面を付けた男
がいました。ていうか、アサシンですね。鼻息を荒くして、ハアハ
アしています。気配遮断でも流石に隠し切れませんよ。

下着ドロに人権はないので、そうそうに三途の川を渡ってもらいま
しょう。

「はい、警察ですよ」

「ギツクウ！！ ち、違います！ アツシはブリーフ派の勢力を探
っていただけで、決してクマさんパンツに興味など……」

「嘘です。バーサーカーですよ」

「なあんだ、バーサーカーか……ってバアサアアアあああああ
あああああああああああ！？」

おや、いい絶叫ですね。今月の絶叫MVPを差し上げましょう。
僕は涙目で尻餅をつく、アサシンに近づきます。

「ごごごめんない！ さ、桜タンは僕の嫁なんで手を出しませんか

ら……」

「お嬢さんを決めるのは、桜ちゃん自信ですよ」

僕は優しく微笑みました。顔は見えませんがね。

相変わらずアサシンは無様に土下座をしています。実に、見苦しいですねえ。

「あ、あ、そうだ！」

ふと頭に豆電球を浮かべて、痴漢魔の汚い手で、僕にすり寄ってきました。後で消毒しましょう。

「ここはアッシと手を組みませんか……。見たところ同業者のようですし、元の世界に戻る方法を探せるかも……」

「それは、一理ありますね」

どうやらアサシンも中の人が憑依しています。アサシンは彼一人が複数かは解りませんが、味方をつけることは一つのアドバンテージにもなりますね。

「じゃあ……」

「はい、笑顔でお断りします」

僕は近くにあったハサミを手に取り、アサシンの脳天に突き刺しました。

「がはっ！」

頭から流れ出る赤い液体を止めることもできず、崩れたドミノのよ
うに床に倒れ伏します。そして、幽霊らしく虚無的に消滅する身体。
それが僕の目に映った下着ドロの末路でした。

「あなた程度じゃ足手まといにはなれど、一切の手助けにはなりま
せんよ」

はあ、無駄な魔力を使ってしまった。雁夜さんの身を気遣わな
ければならないのに……。

今日はもう休んで、明日、雁夜さんと桜ちゃんに朝ご飯でも作って
あげましょう。

霊体化しながら、僕は献立に頭を悩ませました。雑炊とかどうでし
ょうか？

side out

宵闇が辺りを飲み込む樹海の中で、二人の男性が密会をしていた。
片方は僧衣を着て、片方は髑髏の仮面を装着している。
言峰綺礼とアサシンだ。

誤解無きように言っておくと、今この場にいるアサシンは、先程敵
陣で醜態を晒した変態とは別個体だ。

彼の事はアサシン達の黒歴史として、闇に葬られることになるだろ
う。

そして今ここに、新たな黒歴史を打ち立てようとするアサシンがい
たのだ。

（やっべえ！ マーボーが俺だけ呼び出したと思ったら、まさかの

生け贄展開！？ いや待て、原作じゃもっと先の話だったような気
もしなくもないような……多分)

「さて、お前に一つ勅命がある」

「はいっ如何様でございましょうか！ 後、今日もご麗しきマーボ
ー臭が漂っていますね」

「偉く気合いが入っているな……」

妙にハイテンションなアサシンの態度に眉を潜める言峰だったが、
彼らの性格にはそれなりに慣れていたので、気にせず話を続行する。

「今からお前は……」

(マーボー！ マーボー！ マーボー！ マーボー！)

「遠坂時臣を速やかに抹殺しろ」

「はいオレ死んだー！ イツエーイ生け贄ばんざあああいー！」

半ば半狂乱で奇声あげるが綺礼は取り合わない。

彼らが、遠坂邸で焼き肉パーティーを開いたり、暴走族紛いの壘行
や、無断での熱海旅行を見てきたので、耐性はとうの昔についてい
る。

「徒に慎重になる必要はないぞ。仮にアーチャーと対峙する羽目に
なるうとも恐れる必要はない」

「なあにが恐れる必要がないだ、こんのクソマーボーー！！ オレは

「アンタの無神経が怖いわ！」

「不満か？」

口角泡を吹き散らして喚くアサシンに、綺礼は片手の甲を差し出した。そこには三画の紋様が刻まれている。

「いざという時はこれを遣わざるを得ないがな」

「ちっ……分かったよ」

マスターに聖杯から支給される令呪。その効力にサーヴァントが抗う術は、そうそうない。できれば使われたくない代物だ。だからアサシンは従わざるを得なかった。

「覚えとけよマーボー！」

そう捨て台詞を残し、アサシンは遠坂邸へと全力疾走した。ちなみに、一部のアサシン達は綺礼のことをマーボー、マーボーと呼称している。綺礼は正直、その呼ばれ方が好きではないのだ。

この前の焼き肉パーティーのときも、『マーボーは隅で麻婆豆腐でも食いやがれ！』と叫んで、肉を一枚も与えてくれなかった。

綺礼は麻婆豆腐が嫌いになりつつある。

「逝きましたか……」

綺礼の背後から、髑髏の仮面をつけた女性が現れた。彼女もまたア

サシンだ。

「やつにはアサシン脱落の見せ物になってもらう。他のマスターが残りのアサシンに気づかないようにな」

「あまり、軽々しく殺されるのは不愉快ですね。我々の一部を削られるようなものですから」

不満を隠さない声で女性は頷いた。そして、折角の令呪消費のチャンスが無碍にした生け贄アサシンを、内心で毒づく。

(まあ精々ダンスでも踊って、僅かな余生を楽しみなさい)

そして生け贄にされたアサシンはというと、もの見事に遠坂邸への侵入を進めていた。その侵入方法たるや、踊るように優雅なものだった。

憑依者が得るのは、肉体や宝具だけでなく、その経験や技能も引き継がれる。故に結界魔術をすり抜けるなど、彼には造作もない。

(どんなに巧く通り抜けようが、どう足掻いても絶望ですけどね)

原作知識の通りに進むとすれば、数分ともしないうちに彼はアーチャーに瞬殺されるだろう。

己が短命を嘆きながら、結界を作動する要石に手をかける。

(オレの人生終了!)

.....。

.....。

数分後。

「.....あれ？」

アサシンは難無く要石の破壊に成功し、遠坂邸へと辿り着いた。勿論、途中でアーチャーの手にかけられることはなく、だ。

理由は分からないがアーチャーは原作に従うつもりはないらしい。その仮定にアサシンはホッと胸を撫で下ろした。

「もしかすると、『アサシンが可哀想だから、アーチャーに憑依して助けよう』って展開かもな」

虫の良い妄想をしながら、家内の潜入を進めていった。あわよくば、時臣の抹殺が出来るかもしれない。そして、それを報告したときの綺礼の顔が見たいものだと思つて笑う。

そして.....。

「こちらスネーク。遠坂凜の自室に潜入した。引き続きパンツの捜索を行う」

小学生の部屋に忍び込み、独り言を呟いていた。絶賛、クローゼットをまさぐり中だ。

「ウエへへへへへ。凜ちゃんのパンツどここかなっ？」

綺礼からの名目上の使命を忘れ、下着の蒐集に励むアサシンだった。仮面の裏では鼻の下を伸ばし、気持ち悪いほどにやっつけている。

痴態の権化、ここにありけり。

「おっとハンカチも必要だな。主に使用専用として」

変質行為に熱中するあまり彼は身を隠すことも、気配を遮断することも忘れていた。だから、気づかなかつたのだろう。後ろに黄金のサーヴァントが控えていたことに。

「こちらスネーク。凜ちゃんのパンツは粗方回収した、すぐ本部に帰還する」

「通報しますた」

「了解。すぐさま自首を……あれ？」

今更ながらアサシンは、アーチャーの存在を認知したようだ。黄金の鎧に、逆立つ金髪と紅蓮に煌めく双眸。それらを持ち合わせる、英雄王ギルガメッシュの存在を。

そして、死亡フラグが立ったことに。

「やれやれ……………」

パン！ツーン！マル！見えるか！！（後書き）

変態には然るべき天罰を。今回のテーマはこれですね（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5700z/>

気が付いたら第四次聖杯戦争のサーヴァントに全員憑依していたZ E

2011年12月20日00時48分発行